

早稲田大学出版部

一〇〇年小史

早稲田大学出版部編

一〇〇〇年小史

早稻田大学出版部

早稻田大学出版部編



早稲田大学出版部 100 年小史

1986年10月21日 初版第 1 刷発行

検印省略 編者 早稲田大学出版部

発行者 落合 東 朗

発行所 早稲田大学出版部

〒 160 東京都新宿区戸塚町1-103

振替東京3-1123 電話(03)203-1551

落丁・乱丁本はおとりかえします。 安信印刷・中條製本工場

ISBN4-657-86027-5

早稲田大学出版部一〇〇年小史／目次

創業一〇〇年にあたって	1
出版部前史	3
東京専門学校出版局時代	16
東京専門学校直営時代	26
出版部の大学からの分離	37
匿名組合から株式会社へ	52
種村宗八私記「早稲田大学出版部の沿革と大学との関係」	61
トロイカ体制の終焉	73

シエークスピア全集始末						84
講義録の廃刊まで						91
講義録を購読した人びと						103
『日本入門』の刊行まで						115
役員名簿						133
あとがき						134
早稲田大学出版部出版目録					末尾	1
付 早稲田大学図書館蔵						
東京専門学校講義録目録					末尾	50

創業一〇〇〇年にあたって

早稲田大学出版部創業一〇〇〇年にあたり、小冊子ではありますが、そのあゆみをたどる機会をえましたことは、望外のよろこびです。

一八八六（明治一九）年、早稲田大学の前身、東京専門学校の承認を得て同校の講義を通信教育による講義録の形で発行しはじめましてから、本年をもって一〇〇〇年を迎えます。

明治維新という先進国に多くを負わねばならぬ特別な状況の中で、東京専門学校の開校にたずさわった人びとは、学問の外国への隷属を憂い、邦語による教授、すなわち自国語による学問の必要を痛感していました。日本人は日本語で学問ができるようでないといけない、という考えをもって学問の独立のひとつの意義としました。小野梓をはじめ小野に心酔した高田早苗や天野為之が出版事業や著述活動を理想としたのは、このような思想にもとづくものでした。東京専門学校出版局による講義録発行の趣旨も、そこにあつたのです。

この一〇〇年の歴史は、出版部の発足に深くかわり事実上の主宰者だった高田早苗が引退する一九三三（昭和八）年二月までを第一期、出版事業の主力である講義録の刊行を停止する一九五八（昭和三三）年三月までを第二期、以

後を第三期というように大きく分けることができます。

第一期から第二期を通じて出版部の主力は早稲田大学の校外教育、講義録の発行に傾注されました。このあいだに二百数十万人の校外生（講義録購読者）を世に送り、多くの逸材を育成しております。その経営形態も委託、直営、匿名組合、株式会社というように移行し、社会の変動とともに浮沈をくり返しながら、図書の刊行や叢書の予約出版などによって危機をくぐりぬけてきました。

講義録が廃刊になった第三期に入りましてからは、大学出版部という使命にしたがい、学術専門書と教科書を主とする書籍の出版に力をそそいでおります。

この一〇〇年を契機としまして、出版部は大学の出版部に課されたユニバーシティ・エクステンションの理念に副う新たな飛躍を期しております。今後とも出版部に対しましてご鞭撻とご支援をたまわりますようお願い申し上げますとともに、一層の努力を誓う次第でございます。

一九八六年一〇月

早稲田大学出版部

出版部前史

早稲田大学の創設者はいうまでもなく大隈重信であるが、関係者は、大隈とその意をうけて実際に大学の前身、東京専門学校の設定にあたった小野梓のふたりを開祖と呼んでいる。さらに草創期から相たずさえて学校運営の推進力となつて、今日の繁栄をもたらした高田早苗、天野為之、坪内逍遙を三尊、これに市島謙吉を加えた四人を四仏と称したが、いまでは四尊というのが普通である。

出版部第一期の黄金時代は、この四尊のうち学生時代の親友であるとともに生涯の盟友だった高田を中心とする坪内、市島三人のいわゆるトロイカ体制のもとにきずかれた。出版部について語るとき、しばしば言及されるのは、小野梓の理念のひとつとされる出版を兼ねた書店の経営で、小野のおこした書肆、東洋館の事業は挫折したけれども、その遺志の一端は出版部によって生かされたといわれる。

小野は一八五二（嘉永五）年、高知県宿毛の郷士の家に生れた。私塾で漢籍を学び、一四歳で藩校日新館に移ると、たちまち頭角をあらわし、秀才の名を博した。戊辰戦争にさいしては宿毛城主の結成した機勢隊に参加し、このとき年号が明治に改まった。翌年勉学のため上京したが、土佐出身の在京者にひらかれた藩校ではなく、旧幕直轄の昌平

費に入ったため、藩の不興を買って国元に呼びもどされた。

小野は周囲の困惑をよそに、士分を脱して平民となり、自由に学問のできる道を選んだ。そして、かねてから梓の英才に注目していた大阪在住の義兄小野義真のもとに身を寄せた。一八七〇（明治三）年七月、義真のすすめにしたがって上海に遊び、翌年アメリカに留学する。ニューヨークで法律を学ぶうち、そのひたむきな勉強ぶりが認められて、一年後大蔵省の給費留学生としてイギリスに渡り、ロンドンで財政、銀行について研究、かたわら英国憲法や議會制度、各国の政治制度を調査した。

一八七四年五月に帰国。馬場辰猪などと人間共存の道を考究する同人組織「共存同衆」をおこして、欧米の制度文化について研究をすすめた。月に数回、法制、教育、理財、商業、衛生の分野にわたって研究討議する例会をもち、機関誌『共存雑誌』（一八七五年一月創刊、八〇年五月終刊、全六七号）を発行した。島田三郎、鳩山和夫、菊池大麓などの著名人も加わり、啓蒙運動の一翼をになった。

大隈に近づいたのは小野義真の紹介によるもので、大隈は小野梓の学識と政治的才能に注目した。小野がローマ法を翻訳注解した『羅馬律要』を脱稿したのは、一八七六年四月である。同年八月、司法官吏に登用された。すでにラフワーク『国憲汎論』の原形をなす『国憲論綱』の執筆をはじめていた。太政官書記官、元老院書記官を歴任する中で、政府部内の薩長専制に抗してたびたび意見書を出し、罷免されようとしたとき、大隈が庇ってその自重をうながした。小野が大隈の知己に深く感じたのは、このときであったといわれる。一八八〇年会計検査院の開設とともに検査官に就任した。

四尊といわれる高田、天野、坪内、市島は東京大学文学部の同級生である。高田は、桜田門外の変がおこった一八六〇（万延元）年三月、江戸深川に生れた。高田家は代々江戸の市民で、祖父高田与清（号は松屋）は国文学者として

知られる。

天野は同じ万延元年一二月、唐津藩医の子として江戸唐津藩邸下屋敷に生れた。坪内が現、岐阜県美濃加茂市に尾張藩代官所徒士格の子として呱呱の声をあげたのは、五九（安政六）年五月であった。市島は六〇（安政七）年二月、越後国北蒲原の豪農の家に生れた。四人はほぼ同年といっている。

天野が東京外国語学校を経て東京開成学校に入学したのは、一八七五年九月、東京英語学校から高田と市島が、名古屋英学校から坪内が入学したのは、翌七六年九月である。

高田らの同期生には、数学者、物理学者として知られる藤沢利喜太郎、田中館愛橘、東京専門学校の設立に関与する山田喜之助、砂川雄峻、山田一郎、岡山兼吉、田原栄、のちに同校で教鞭をとる有賀長雄などがある。

一八七七年四月、東京開成学校は東京医学校と合併し、東京大学と改称した。予備門四年、学部四年の新制度への移行にともない、旧開成学校普通科第三年は学部一年に、同第二年は予備門の最高学年に、第一年は予備門第三学年と認定された。この改正のとき天野は開成学校普通科第二年であったから予備門の最高学年に相当し、同年九月には学部一年になるはずであった。しかし、天野が最高学年を留年したため、一年遅れて入ってきた高田、坪内、市島らと学年をともにする。

七八年九月、四人はそろって文学部にすすみ、政治学を専攻する課程を選んだ。三年になったとき政治学専攻は政治理財学専攻に改まり、八一年に文学科は哲学科、政治理財学科、和漢文学科に制度化される。七八年八月に文学部教授に就任したアメリカ人の哲学者で美術研究家のフェノロサが、ひとり政治学と経済学と哲学を講じていた。

高田は雅号に半峰を用いたが、その著書に『半峰昔ばなし』（早稲田大学出版部）がある。一九二七（昭和二）年の発行だから、高田六六歳のときである。

「はしがき」に逍遙、春城（市島謙吉）二老友のねんごろな勧めによって上梓に漕ぎつけることができたとしるしであり、本文の随所にふたりの感想が書き添えられていて、それが補注であるとともに三人の友誼の深さを物語っている。

市島は、この補注で高田の英語力を賞揚し、それは学生時代に西欧の文学を耽読したせいであろうとのべ、坪内は高田によって外国文学の目をひらかれたと書き、同書の跋文でもこのことを強調する。

半峰君は、私を掖誘して外国文学を鑑賞するの目を開かせてくれた最先の益友である。君の奨誘がなかつたら、私は文学を専門とはせなかつたかも知れない。それほど私は、小説及び劇に関する著者の批評によつて、屢々啓発される所があつた。實際、あの時分、内外の文学、芸術に対して、就中劇と小説に対して、君ほどの鑑識を有してゐた者は教師にすら殆ど無かつたから、学生間には、勿論、稀有であつた。少なくとも私は、故岡倉天心以外に其匹敵があつたとは憶ひ得ない。いや、文芸の上ばかりではない。人性批判といふことの興味を私が学びはじめたのは、主として君の指導によつてである。

文学部の同級の中で高田がとくに親しくしていたのは、市島、坪内、山田一郎などであつた。坪内の『当世書生氣質』は、当時の彼らの学生生活を描いたものといわれる。天野とはともに晩成会を組織して、演説などの練習をしているから、同級生として普通の交際はあつたと思われるが、酒食をともにして議論に興じるという間柄ではなかつたようだ。途中から学年が同じになつたことや、天野が経済的にめぐまれていなかったことも、あずかっていたにちがいない。

在学中高田は、同窓橋槐二郎の父橋機郎が本郷弓町に経営する進文学社の英語教師をつとめた。当時、この塾舎の一室を借りて統計院の官吏小川為次郎が住んでいた。槐二郎の兄頭三の友人であるが、高田は小川と九歳という年齢のへだたりを越えて親しくなった。高田がきわめて魅力のある青年だったことがわかる。

小川は商家の生れで学歴はなかったけれども、広い教養をもち、ことに国文に造詣が深かった。日本における近代統計の先覚者で統計院大書記官となった、杉享二について統計学を学んでいた。この小川には坪内も最初の出版や文章上のことで恩恵を受けている。

高田を会計検査院の一等検査官小野梓に引き合わせたのは小川で、東京大学卒業を翌年にひかえた一八八一（明治一四）年、高田の記憶によれば二月とあるが、五月から八月のあいだであったようだ。高田は小野の初対面の印象を『半峰昔ばなし』の中で回想している。

私が小野さんに初めて面会したのは明治十四年の二月であつたと思ふ。当時小野さんは三十を越えた位の年配であつて、私は二十二歳の青年であり、大学文科の一学生であつた。私は初めて小野さんに会つて大いに啓発される処があつた。私は此時迄外山さんとか浜尾さんとかいふ学校の先生以外に余り先輩に面会した事はないし、且つ其人々は大体に於て教育界の人であつた。処が、此時私は初めて所謂政治家的風采を備へた人物に面会したのであるから、先づ以て頗る珍しいといふ感じがした。小野さんは身長も高くないし体軀も瘦せて居て、所謂堂々たる風采を備へて居る方の人ではなく、又美男といふ柄でもなかつたけれども、何処となしに威厳のある人で、疎髻を蓄へ、余り大きくはないが、光りのある眼を有つて居る人であつた。其弁舌には可なり土佐なまりがあり、極めて雄弁であつた。其談ずる処は天下の大勢であり、又當時に於ける政治界の消息を洩してくれられたのは、私に取つて生れ

て初めて聞いた事であった。

小野さんは大隈、伊藤の両先輩を評して、才幹に於ては相伯仲すると言つてよいが、胆勇に於ては大隈氏遙かに勝り、而して大隈氏の長所は財政と外交、伊藤氏の長所は寧ろ立法であるといふ様な事を私の耳に入れた。そんな話は無経験な私に取り、頗る珍しかったのみならず、其態度、言ひ回しは、今迄大学で教授を受けて居た先生達とは頗る趣が異なつていた処から、忽ちにして小野さんに対する憧憬の念が私の胸中に充満するやうになつた。

このとき小野から「兎に角君達は大学に於て、政治、経済といふ様な当世必要の学問をして居るのであり、自分はいふ實際政界に身を置いて君達の知らぬ事を多少知つて居るから、君の友人中でこれとは思ふ人があつたならば、幾人でも連れて来て一週一度会合し、互に知識の交換をしよう」(上掲書)という提案があつた。高田は文学部と法学部の同窓の中から岡山兼吉、山田一郎、山田喜之助、市島謙吉、天野為之、砂川雄峻の六人の政治青年を選んで小野の住まう浅草橋場の小野義真邸に通つた。坪内が加わらなかつたのは、留年が決定してしたこと、政治に関心が薄かつたからである。翌年に東大卒業をひかえた七人の学生たちは、小野学校の生徒として政治のいろはを手ほどきされた。この会を鷗渡会と命名したのは、私邸に近い「鷗の渡し」にちなんだのである。

同年一〇月、憲法制定、国会開設および北海道開拓使の官有物払い下げをめぐる対立から筆頭参議大隈重信が政府を追われた。大隈に殉じて農商務卿河野敏鎌、逓送総監前島密をはじめ矢野文夫、小野梓、牟田口元学、島田三郎ら十数人にのぼる官僚もまた野に下つた。

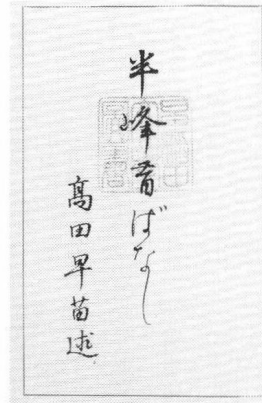
一〇月の政変以後、政党の組織を思い立った大隈は、翌一八八二年三月を目標に結党の準備をすすめた。小野は大隈のブレンとして、忠実な同志として党の規約および政策綱領の起草にあたり、八二年四月に入ってようやく立憲

改進黨の結成式に漕ぎつけた。小野が鷗渡会のメンバーを大隈に引き合わせたのはこの年のはじめで、彼らはこぞって新党に集まり、その主軸を形成した。

高田たちは小野の言動を通じて明治一四年の政変を見、改進黨の綱領や宣言の起草に立ち合った。『半峰昔ばなし』の「鷗渡会」の記述の補注に市島の言葉がある。

吾等はこの会に於て始めて政治の手習を始めた。先生から偏務条約の不当に就て慷慨談を聞いたのもこゝである。先生が北海道払下事件の非挙を鳴らして吾等に聞かされたのも此会である。吾等は先生の帷幕にゐて、政治的手習をなしながら、改進黨の創立に参画したと云へば妙に聞こえるであろうが、高田君の説かれたやうに改進黨の綱領や宣言などは吾々が帝大で教はつたことを先生の参考に供し、それを先生が換骨奪胎して書かれたのである。先生が此文を作るには幾十回も稿を改めて例の崇高な音調で度々吾等の前に朗読された。吾々ウブの若ものは先生から始めて實際政治の活機を聞いた。先生を批判者として演説の稽古をしたのも此会である、いつも集会すると長時間にわたり其都度先生の馳走に預つた。(中略)考へて見れば先生は吾等が政治生活を始めるに就ての第一師である。

明治一四年の政変に憤激して退学した市島をのぞいて八二年七月、鷗渡会の六人が東京大学法学部および文学部を卒業した。両学部あわせて卒業生は一二人であつたから、そのうち半数が大隈派に加わつたことになる。政府があつたのは当然で、のち総長となる外山正一などを介して進路について種々働きかけがあつた。一〇月に行われた学士号授与式では、大学当局は、学生のあいだに人気があつたフェノロサに新卒業生に政党参加を戒める演説をさせた。



鷗渡会の七人は、日本の近代化には高等教育を身につけた人材の育成が急務だとする大隈の意をうけて、小野を中心にかねてから構想のあった学校設立の事業に参画した。すでに小野によって段取りがつけられていて、それぞれの役割も決まっていた。高田と天野は学校の業務に専従する。山田一郎と市島は新聞記者と学校を兼務する。岡山、砂川、山田喜之助は弁護士を開業し、兼ねて学校の法律部を受け持つ、というものであった。大隈の別邸南豊島郡戸塚村の早稲田の地に、政治経済学科、法律学科、理学科（一八八四年廃止）、英学科の四学科をもつ、早稲田大学の前身、東京専門学校が「学問の独立」の理想を高くかかげて船出したのは、一八八二年一月二一日。講師七人、学生八〇人のささやかな規模であった。校長には大隈の養子英麿、教員には市島を除く鷗渡会のメンバーがそっくり入り、他に東京大学を病氣中退して広島中学の教師をしていた田原栄が英麿の縁故から加わって英語を担当した。上記したように田原は、高田と東京大学予備門時代の同期生である。

坪内については、『半峰昔ばなし』の「小川為次郎君」の中に坪内自身の補注がある。

自分は寄宿舎生活中、くだらん小説を読んだり何かして、あふらノ、と風吹き鴉のやうな風に日を過していたのが祟つて、フェノロサの政治学と哲学とで十五年の卒業試験に落第してしまった。で其年の秋以後は給費離れの自活貧乏書生となり、寄宿舎を出て、猿楽町に下宿し、半峰君の紹介で、進文学社の英語教師となり、同時に鴻臚学舎といふエタイの解らん名称の招牌を下宿屋の軒先に掛けて、わづか四五人の生徒を集めて訳読を教へたりして、生活費の不足を補つてゐた。スコットの「ザ・ブライド・オブ・ラムマームア」の一部分を訳して、やはり半峰

君に口を利用して貰つて、橘氏（進文学社の経営者）の長男頭三君の名を借りて出版したのは其頃であつた。其序は、小川為次郎君が書いてくれた。私が拙い馬琴調の非を悟りはじめたのは、小川君の此際の批評からであつた。たしか、三四ヶ処添削して貰つた。

こうして高田たちより一年おくれて一八八三年に東京大学文学部を卒業した坪内は、高田に誘われて東京専門学校の講師となり、はじめイギリスの歴史や憲法を教えた。同じ年、小野はかねてから構想していた内外良書の普及をはかるため神田に書肆、東洋館を設立した。その記念すべき最初の出版物は、坪内の『自由太刀余波銳鋒』^{ナゴリノキレテ}と高田の『貨幣新論』であるが、政治経済書の刊行に主力をおき、政治的啓蒙につとめた。

小野の最晩年は党務、東京専門学校の校務、書肆の経営、執筆に明け暮れた。小野の緻密にして峻烈な講義は、学生に大きな感化を与えた。

一八八三年から八五年にわたって『国憲汎論』上中下巻、『民法の骨』（上篇）を上梓。八五年一〇月の日記に、『国憲汎論』三巻の合装がなつたこと、それを手にとってひとにぎりに余ることを確かめ、大著といつて恥じることはないであろう、としたためる。その年を越した八六年一月一九日、神田錦町の自宅で亡くなつた。享年三四歳であつた。小野が生涯の理想とした政治・教育・出版については、改進黨の結成、東京専門学校の創設、東洋館の開設となつてあらわれ、高田をはじめ小野をめぐる人びとに鮮烈な印象を残した。高田にしても天野にしても、こうした小野の生き方に共鳴し、同じ立場から政治に関与し、教育にたずさわり、著述にしたがつたのである。高田は、小野のかかげた理想の継承について、『半峰昔ばなし』の中にひかえめにしるしている。